

連携協働科目の実践について

川上泰彦（ykawa@hyogo-u.ac.jp）

【連携・協働科目開発チーム】

濱野清・神内聡・三浦智子・西森康子



「連携・協働」科目の位置づけ

(1) 先導的・革新的な教員養成プログラム・教職科目の研究・開発

① 新・教員養成スタンダードの策定

新・スタンダードの項目に即したテーマ設定で教職科目体系を精緻化＋フレキシブルな改善システム

新・兵庫教育大学教員養成スタンダード

- ▶ e-ポートフォリオや資質・能力ごとの GPA による可視化システム

② 先導的・革新的教職科目の開発

- テーマ1 学習者中心のデザイン、ファシリテーターとしての教師の役割、インクルーシブ教育
- テーマ2 EdTech、教育データの利活用およびSTEAM教育
- テーマ3 教師の連携・協働による教育体制の構築のための教育
- テーマ4 教職大学院共通5領域に加える新たな領域科目の開発とその汎用化

学生

- ▶ 学習者観・学習観の転換
- ▶ インクルーシブ教育の理解
- ▶ EdTechが活用できる
- ▶ 教育データが活用できる
- ▶ 教員採用試験受験率の向上

新任教師

- ▶ 学習者中心の授業ができる
- ▶ インクルーシブ教育が実践できる
- ▶ EdTechが活用できる
- ▶ 教育データに関する実務ができる
- ▶ STEAM教育が実践できる

自律した学習者を育てる教師

- ▶ 児童・生徒の認知・非認知能力の向上を支援する教師
- ▶ カリキュラム・マネジメントを通して授業や学級経営を改善する教師
- ▶ 連携・協働の中核を担う教師
- ▶ フレキシブルに学び続ける教師

- ・ 「テーマ3 教師の連携・協働による教育体制の構築のための教育」に該当



「教職基盤」における位置づけ

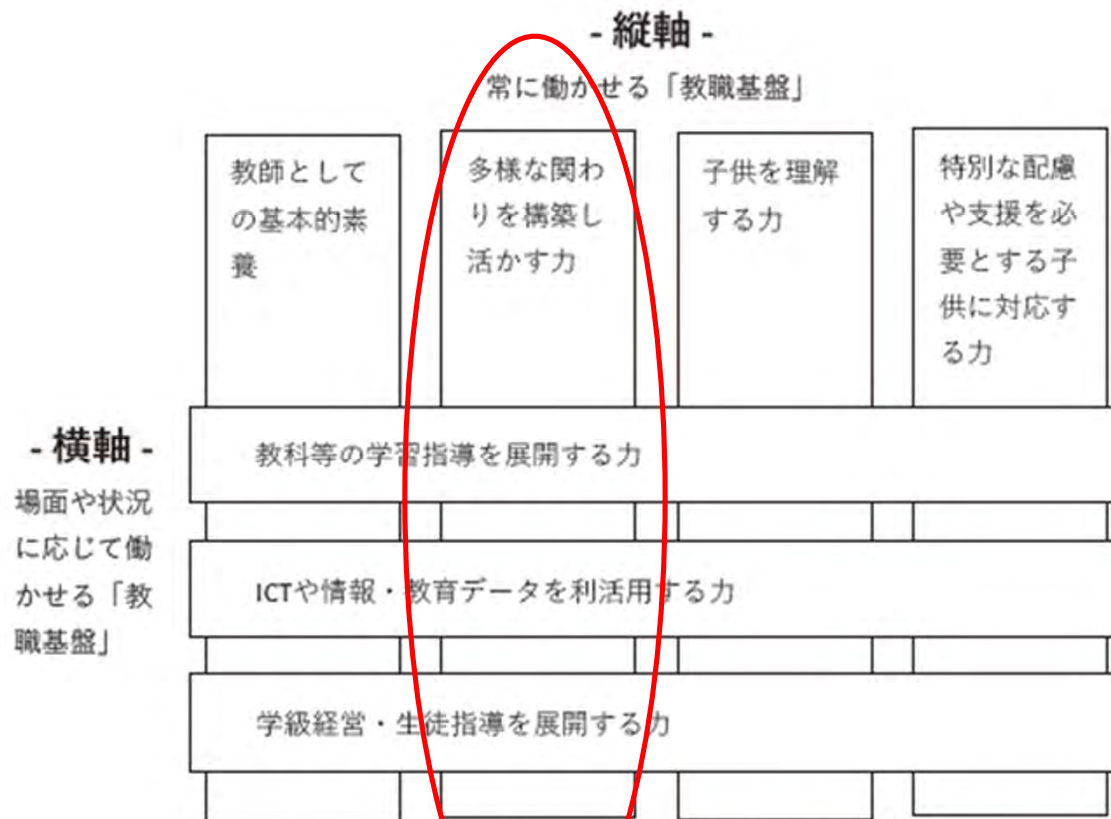


図2 「教職基盤」の構造化

- 常に働かせる『教職基盤』
 - 多様な関わりを構築し活かす力
 - 「連携・協働」
 - 「コミュニケーション」
 - 「ファシリテーション」
- 具体的には「学習指導」「学級経営・生徒指導」「ICT・情報・教育データの利活用」の場面での発揮が期待される

「連携協働科目」全体のコンセプト

- 学校教育の高度化・複雑化→「組織的対応」が求められる
 - 具体的には：「学校」（職場）の内部・外部での連携が求められる
 - 教職課程において「組織マネジメント」「連携協働」を扱う必要
- ただし、初任期教員にとって「組織マネジメント」をイメージするのは難しい（中堅期以降の課題として認識される傾向）
- 学生にとっての「連携協働をめぐる課題の広がり」を整理
 - 学校組織マネジメントに関する学びの「入口」としての「**学校安全**」
 - 学校内に軸足を置いた連携課題としての「**児童生徒の指導・支援**」
 - 学校外も含めた幅広い連携課題としての「**防災**」

「連携協働科目」 3科目の設定

- 1. **「子供の安全と学校組織」 (1年次) : 今年度実装**
 - 学校組織マネジメントに関する学びの「入口」
 - その後の学校体験活動等への応用を期待
- 2. **「教師の連携・協働と学校経営」 (3年次)**
 - 主に学校内に軸足を置くことが求められる連携課題
 - 実地教育（教育実習）との相互作用を期待
- 3. **「多機関連携と学校防災」 (3年次)**
 - 学校外も含めた幅広い連携課題

「連携協働科目」における学びの重点

- **題材**に関する学び
 - 「学校安全」「防災（教育）」「児童生徒の支援」に関する知識
- **仕組み**に関する学び
 - 学校組織のマネジメント体系と学校内部の連携協働
 - 学校外との連携（広がりと接点）
- **見え方（視点）**に関する学び
 - 学校内・学校外を問わず、他職種協働において発生する、事象の「見え方の違い」の認識（と視野の広がり）
 - 連携協働の必要性と難しさの体験

子供の安全と学校組織 1年次

- <学習目標>

- 学校安全に関する全体像を把握・理解し、学校内での安全管理（リスクの察知と対処・回避、事故発生時等の対応）について、具体的なイメージを持つことができる。
- 学校安全の観点から、学校の組織と活動・施設の管理について理解する。

- <内容>

- 児童生徒の年齢・発達段階（学校種）によって異なる「学校安全」の勘所を知る
- 学校生活にかかる危機事例（教室内外の生活安全、交通安全、学校事故、不審者対応等）を用いた演習と、関連講義の組み合わせ

回	授業日	授業のテーマ
1	4月10日(水)	イントロダクション: 学校生活における「リスク」とは
2	4月17日(水)	特別支援学校における「安全」(特別支援学校教員の講話)
3	4月24日(水)	幼稚園・小学校における「安全」(附属幼稚園・小学校教員の講話)
4	5月 1日(水)	小学校・中学校における「安全」(附属小学校・中学校教員の講話)
学校観察実習(5月7日(火)～ 5月14日(火))		
5	5月15日(水)	学校観察実習をふまえた校種別「安全」の振り返り
6	5月22日(水)	学校における生活安全①(ケース教材の演習)
7	5月29日(水)	学校における生活安全②(予防策の検討と講義)
8	6月 5日(水)	教育活動中における事故への対応①(ケース教材の演習)
9	6月12日(水)	教育活動中における事故への対応②(予防策の検討と講義)
10	6月19日(水)	学校生活・教育活動における安全体制(第6回～10回の振り返り)
11	6月26日(水)	登下校における交通安全①(ケース教材の演習)
12	7月 3日(水)	登下校における交通安全②(予防策の検討と講義)
13	7月10日(水)	食物アレルギーへの対応①(ケース教材の演習)
14	7月17日(水)	食物アレルギーへの対応②(予防策の検討と講義)
15	7月24日(水)	子どもの安全における地域・家庭連携(第11～14回の振り返り)



重視したこと①学校観察実習との連動

- 例年5月に「学校観察実習」が計画・実施されている
 - 附属幼稚園・小学校・中学校を各1日ずつ見学・観察
 - 県内の特別支援学校を1日見学・観察
 - 1年次生の「学校の見え方」が変化することを期待する（「生徒目線」から「教師目線へ」）
- 「連携・協働科目」が1年次・前期に開講することを活かし、相乗効果を狙った
 - 学校観察実習に先んじて、「安全」にフォーカスしたゲスト講義を実施した（上記各校と調整）
 - 「安全」にも着目した学校観察を促す
 - 「学校の見え方」の変化を促す
 - ゲスト講義の内容の定着を図る

附属学校園等からのゲスト講師

- 各校種における学校生活上の安全について講話を依頼
 - 主に身体的な安全（学校における安全確保・事故防止）
 - 特別支援学校（第2回）
 - 障害の種類に応じた「危険」の違い
 - 施設面での安全配慮、教員間の連携・協働による安全配慮
 - 幼稚園・小学校（第3回）
 - 発達段階に応じた配慮、安全に関する指導
 - 安全教育と安全管理、関連する施設・備品等
 - 小学校・中学校（第4回）
 - 学校教育活動における安全配慮
 - 関連する研修の様子

特別支援学校での学校安全に関する資料(1)

安全な避難



安全な歩行



実際に起きた事故
点字ブロック上の車に衝突



分電盤の扉が開いていて衝突



特別支援学校での学校安全に関する資料(2)



29

初めての活動には抵抗が高い

- 見通しを持ちにくい
→見通しを持つことができれば大丈夫
- 一度失敗体験をすると、繰り返す恐怖を感じる
→成功体験をすると定着しやすい
- 経験から、活動の乗り切り方を普遍的に学ぶことが難しい
→その都度、どのように活動したらよいか伝えると、安心して取り組める

入学式の支援

- 前日に、会場を見に来る
- 写真などで簡単な流れを示す
- しんどくなると、外に出てもいいことを伝えておく
- 伝え方と伝える人を教える



発達障害のある子

- 見通しがつかないこと...とても苦手です
写真カードの見通し
完遂時のごほうび(ハイタッチ)
- +自分でできるように見守る



幼稚園での学校安全に関する資料

幼稚園の子ども

生活経験が乏しい・・・生後3年から5年しか生きていない
物事をイメージできない

多くの子どもは字が読めない、ひらがなが読めても意味が分からないことも多い

自分のことが自分でできないことも多い

何かをするには

子どもが理解できるように工夫する
子ども自身でできるように工夫する

例：ひなんするときの やくそくは？



おさない



はしらない



しずかにしよう



もどらない

幼稚園の安全

やさしく
豊かな心を
もつ子ども

教育目標

健康な
体の子ども

よく覚えて
最後まで
やりぬく子ども

安心

安全

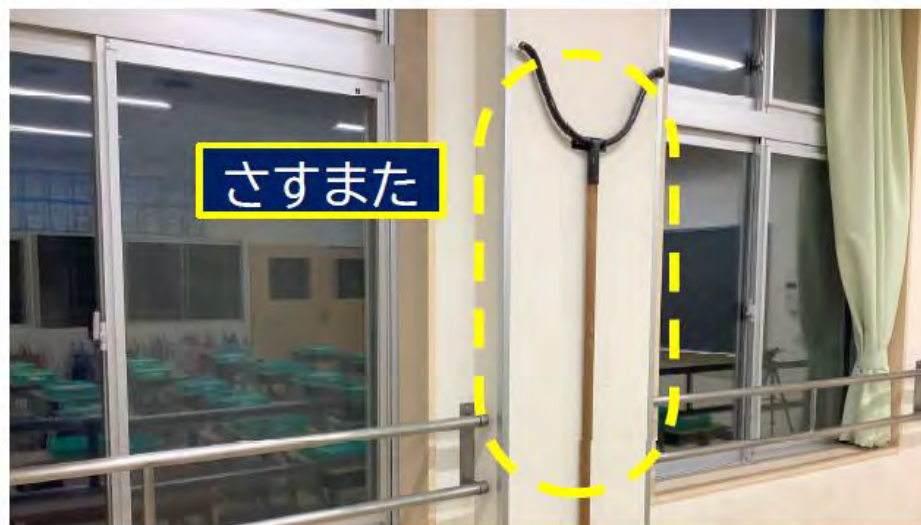
へやのなかでは、
だんごむしのポーズ



そとでは、しゃがむ すわる



小学校・中学校での学校安全に関する資料(1)



小学校・中学校での学校安全に関する資料(2)



附属中学校の1日をのぞいてみよう！

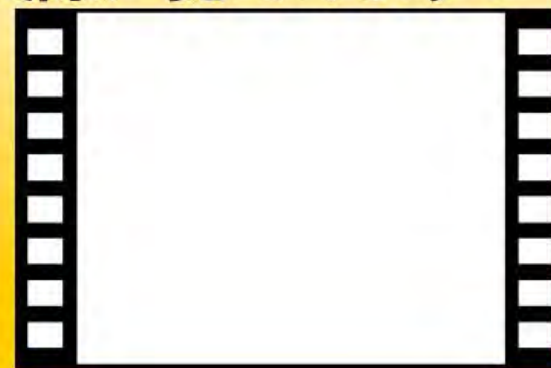
10分休み

授業と授業の間には10分間の休みがある。
生徒の気分も上がり、けがも起こりやすい。

実際に中学2年生の生徒は休み時間を安全に過ごすためにどのようなことを意識しているのでしょうか。



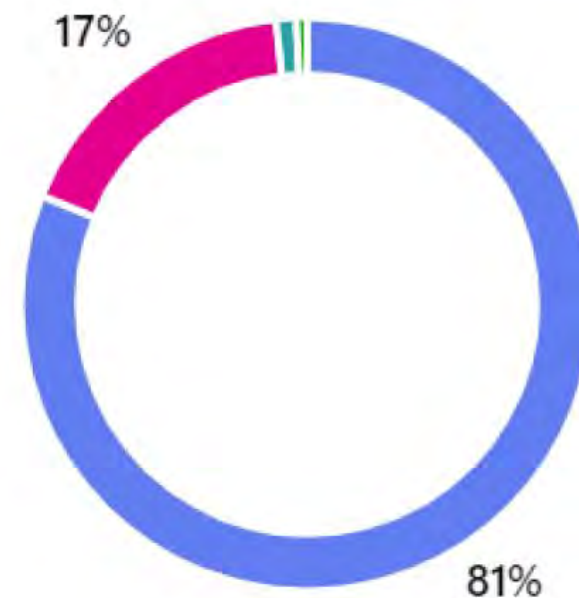
附属中学校の10分休みの様子を
実際に見てみよう！！ 



相乗効果が意識できた、という感想 (第10回時点での「振り返りアンケート」より)

1. 第2回から第4回までは、附属学校園等の先生方によるゲスト講義を行いました。講義での学びは学校観察実習の参考になりましたか。(0 点数)

● とても参考になった	138
● 参考になった	29
● よくわからない	2
● 参考にならなかった	0
● まったく参考にならなかった	1



重視したこと②事例検討を通じた学び

- 具体の課題から学習課題に到達する
 - 実際に学校で起きそうな事例を提示する
 - 「その場ではどう対応するのが良いか」
 - 「そうした事態を招かないためにはどうしたらよいか」・「再発をどう防ぐか」
 - それぞれについて検討
- 個人の検討とグループの検討の往還（2コマをセットで運用）
 - 1コマ目：個人での検討→グループでの検討（→アイデアの提出）
 - 2コマ目：アイデアの共有→解説→個人での検討（振り返り）
 - 若干パターンを変えながら進行

4教室を活用した「分散」と「集中」

- 全体での講義：大教室（108室）を活用【170人】
- グループ別の演習：中教室（102室・302室・304室）と大教室（108室）に分散【各教室42～43名】
 - 5～6人で1グループを編成して演習
 - 小型のホワイトボードやモニターを使って進行
 - 成果についてはLMSを通じて提出

【1コマ目】 演習事例「学校教育活動中の事故」 (途中から)

- 当日つづき：公園から学校へ
 - 11時：
 - 声掛けをして各クラス整列後、学校に向けて出発
 - この時点の公園の気温は33度
 - 帰り道にも同じ児童が「疲れた」と訴え、列から遅れがちに
⇒担任の先生は、行きと同様に声掛けをし、手をつないで一緒に歩く
 - 11時30分：学校到着、各教室に戻る
 - 教室が暑くなっていたので、天井の扇風機を動かす
 - 「疲れた」と訴えていた児童の体調が悪化（高熱・過呼吸・けいれん）
⇒教室の風通しの良い一角で休ませる
 - 他の児童も体調不良を訴えはじめる
 - 11時50分：児童が意識を失う⇒119番通報・病院へ

【1コマ目】 演習課題（個人で検討⇒グループで協議）

- 【問い】 どの時点にさかのぼって、どのような対応をすれば、重大事故を避けることができたでしょうか
- Q1
 - 学校到着（11時30分）時点にさかのぼれたとして、何をする必要があったでしょうか
- Q2
 - Q2-1：公園から帰る途中の時点（11時～11時30分）や公園に着いた時点（10時30分）にさかのぼって「熱中症」の疑いを持った場合、どうしたらよかったですでしょうか
 - Q2-2：公園に向かう途中の時点（10時～10時30分）にさかのぼって「熱中症」の疑いを持った場合、どうしたらよかったですでしょうか
- Q3 【2コマ目に向けた課題】
 - 熱中症への対応ができるようにして校外学習に行くには、どんな準備が必要だったでしょうか

【2コマ目】 演習の振り返りと整理

⇒①題材についての学び

- 「熱中症」への理解⇒どんな対応が必要だったか

熱中症の重症度と主な症状

分類	重症度	主な症状
I 度	軽症 現場での応急処置が可能	めまい・失神、筋肉痛・筋肉の硬直（こむら返り）、大量の発汗
II 度	中等症 病院への搬送が必要	頭痛・気分の不快・吐き気・おう吐 力が入らない、体がぐったりする（熱疲労、熱痙攣）
III 度	重症 入院・集中治療の必要	意識がなくなる、けいれん、歩けない、刺激への反応がおかしい、高体温（熱射病）

②仕組みについての学び

- どのような準備が必要かを考える
 - ⇒学校内ではどのような連携が必要かを知っておく
 - 学校のスタッフの「規模感」についても知っておく
- 例：校外学習における引率の体制を考えたとき
 - この小学校を27学級（各学年4クラス＋特別支援学級3クラス）とした場合
 - 校長、教頭（おそらく1名）、養護教諭（おそらく1名）、事務職員
 - 担任教員27名＋4名（図工・音楽・算数・理科などの専科教員）
 - 兵庫県での追加配分（専科教員が1～2名、学校生活支援員1名程度）
 - 市町村によっては、さらに支援スタッフ
 - 校外学習の支援に出られる教員は何人くらい？
 - 教員だけでは足りなさそうなときは、どうする？

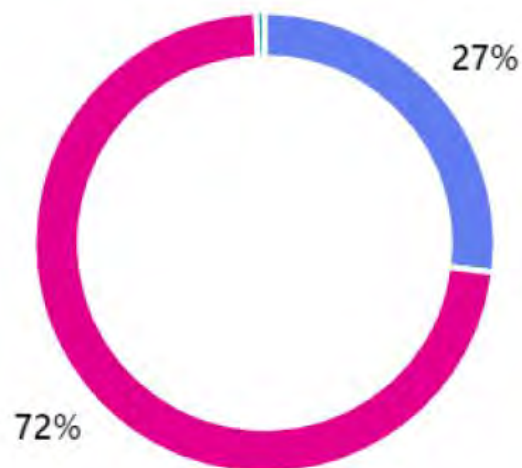
③仕組みと「見え方」についての学び

- 校外学習自体を「やる」「やらない」の判断の難しさ
 - 学年での学習活動として実施している（担任一人の判断では進められない）、という設定
 - どういう状況で「今日は中止しましょう」を判断するか
 - あなた一人がリスクを感じたとして、どう主張しますか？
- 活動段階での「中止する」「引き返す」の判断
 - どのタイミングで「救急車呼びましょう」が言えるか
 - どのタイミングで「もう引き返しましょう」が提案できるか
- どんなことを準備しておく、と、こういう「言いにくさ」を避けられるか？
 - 事前のルール設定や判断基準（マニュアル）について考える

学生の振り返りより 演習教室の設定

第6回から第9回までは、「学校安全」に関する演習を行いました。4教室に分散しての演習についてどのような感想を持ちましたか。(0 点数)

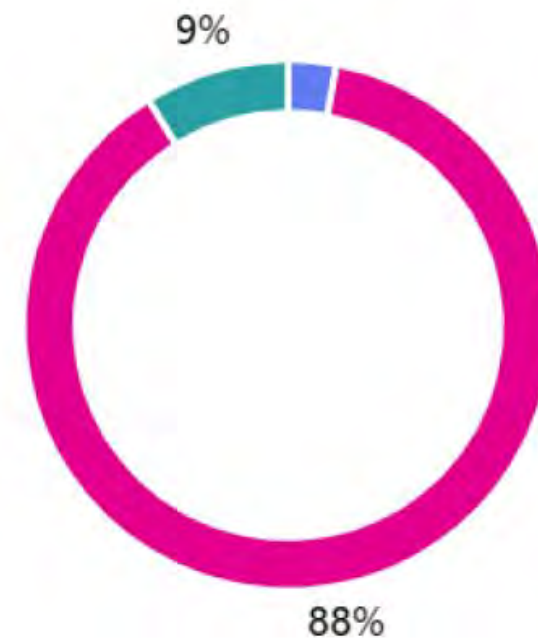
● 大教室（108室）に集合したままの演習がいい	46
● 4教室に分散した演習がいい	123
● もっと小さいサイズの教室に分散した演習がいい	1



学生の振り返りより：グループのサイズ感

第6回から第9回での演習について、グループのサイズ感（1グループあたり5人～6人）について、どのような感想を持ちましたか。(0 点数)

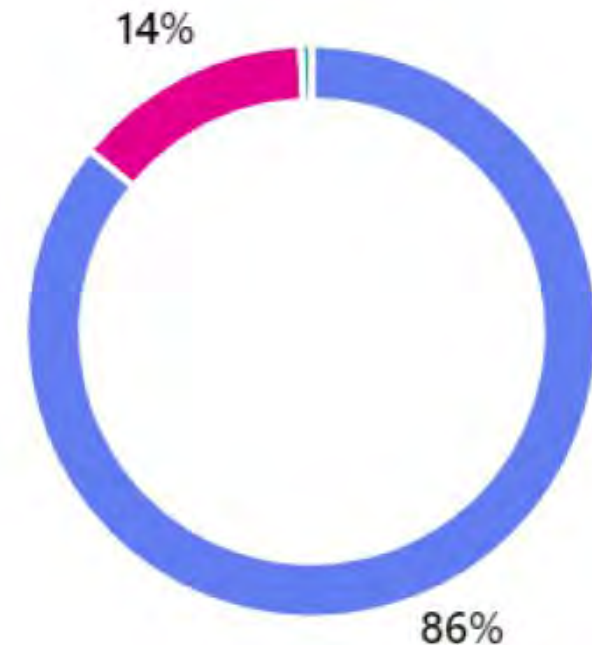
● もっと大きなグループがいい	5
● 現状（1グループ5～6人）がいい	150
● もっと小さなグループがいい	15



学生の振り返りより：関心の深まり

第6回から第9回の演習を通じて、「学校安全」への興味は深まりましたか。(0 点数)

● とても深まった	146
● どちらかといえば深まった	23
● 特に深まらなかった	1



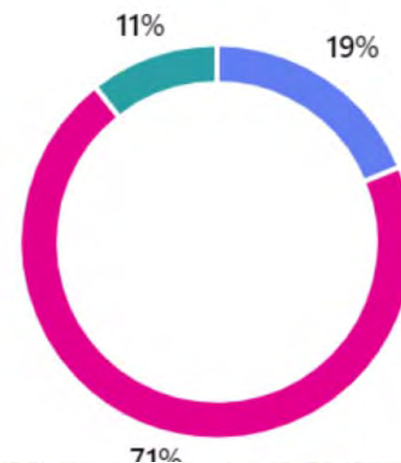
- 第11回から第15回についても同様の傾向

学生の振り返りより ：学習活動

- 授業期間後半にかけて、「調べもの」をする頻度はやや上昇

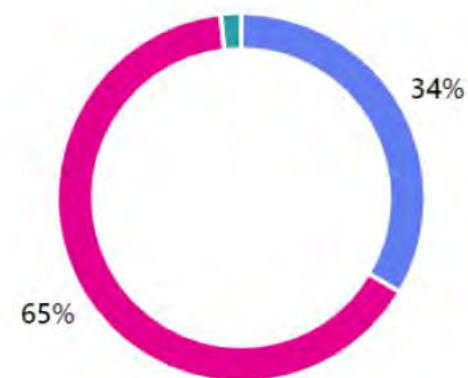
第6回から第9回までの演習に関連して、授業時間以外で「学校安全」についての調べものなどを行いましたか。(0 点数)

● 毎回のよう調べものをした	32
● 1～2回程度調べものをした	120
● 特に調べものはしなかった	18



第11回から第14回までの演習に関連して、授業時間以外で「学校安全」についての調べものなどを行いましたか。(0 点数)

● 毎回のよう調べものをした	56
● 1～2回程度調べものをした	108
● 特に調べものはしなかった	3



今後の課題

- 連携・協働科目開発チームでは「題材の学び」が手薄
 - 学校における生活安全
 - 教育活動中における事故（「身体」に関する専門家）
 - 登下校における交通安全
 - 食物アレルギーへの対応（「食品」に関する専門家）
 - 実務経験の厚いゲスト、各領域の研究者などの協力を仰ぐ
- 評価の難しさ
 - 題材に関する知識、仕組みに関する知識の確認
 - 「見え方」の深まりをどう評価するか

令和7年度の予定

- 1. 「**子供の安全と学校組織**」（1年次）：2年目
 - 関わるメンバーの拡充
 - コンテンツの充実（令和6年度をふまえた加除修正等）
- 2. 「**教師の連携・協働と学校経営**」（3年次）
- 3. 「**多機関連携と学校防災**」（3年次）
 - 令和8年度か以降に向けて、既存科目を活用した試行実践の継続、コンテンツの充実